佳作

「ほんの少しだけの勇気」

渡邊　惠子さん

　父を脳腫瘍で亡くしてから１５年の歳月が過ぎた。享年６７歳、仕事も完全リタイアし、これから母と一緒に、第２の人生をのんびり楽しもうとしていた矢先だった。

「父も定期健診を受けていれば・・・」

　私は今でも、あの頃を思い出す度に涙が出そうになる。

　父は大の病院嫌いで、風邪をひいてどんなに高熱が出ようと病院に行こうとはしなかった。そして、「調子が良くなったら行くよ。」って、いつもその場を茶化していた。

　父が６５歳を過ぎた頃だったろうか。頻繁に失くし物をするようになり、時々ボーっとして焦点の定まらない目をしている時があった。そして歩行中は身体が斜めになっているような気がした。

　母と私は、病院で一度診てもらうように父を何度も説得した。でも父は頑として首を縦に振らなかった。

「病気になったらなったでええ。もし癌が見つかったりしたら、人生そこで終わりや。だからワシは知らんままコロっと逝くんじゃ。」

これが父の長年の口癖だった。

　しかしそれから間もなく、父は自宅で突然倒れ、救急車で運ばれてそのまま緊急入院となった。

「ご本人さんは、だいぶ前から自覚症状があったと思いますよ。今までだいぶ我慢されてたでしょうね。」

精密検査の後、主治医から言われたその言葉が未だに忘れられない。

父は入院してから亡くなるまでの約１年の間に、３回もの開頭手術を余儀なくされた。身も心もボロボロになって、父の描いていた理想の死とはほど遠い結果となってしまった。

私は父の苦しむ姿を見て、病気は放置しておくと楽には死ねないという現実を突き付けられたような気がした。

自己管理を怠ると、後になってそのしっぺ返しが何倍もになって自分に跳ね返ってくる。そして父に寄り添う私たち家族も、胸が潰れそうだった。

私は父の壮絶な闘病生活から、早期発見がいかに大切かということを思い知らされた。

「あんな辛い思いは二度としたくない。」

父の死をきっかけに、私は毎年欠かさず同じ病院で、自分の誕生日月に健診を受けるようにしている。過去のデータが揃うので、現在までの推移が確認できて分かりやすい。

私の友人で胃癌と子宮癌の手術をした人がいるが、２人とも毎年受診していたお陰で、ごく初期の段階で病巣を発見することができた。術後１０年以上経った今もすこぶる順調で、元気に走り回っている。

著しい医学の進歩で、癌は完治する時代になった。そして早期に適切な治療ができた人ほど、その確率が高まるのは周知の通りだ。

自分の大切な命を守るのは、「ほんの少しだけの勇気」だ。

その「勇気」は、自分自身のためだけではなく、自分のかけがえのない家族にも明るい笑顔と安心を届けてくれるだろう。